

## 筑波大学附属図書館蔵『山路の露』について

——二類本における位置付けとその性格——

岡 陽 子

はじめに

『山路の露』の伝本については、早くに池田亀鑑氏により版本とは異なる系統「古本」として玖山九条種通筆本が紹介された<sup>1)</sup>後、本位田重美氏によって物語後半に見られる約一丁分の大きな異同から大きく一類本・二類本の二系統に分類できることが指摘された<sup>2)</sup>。すなわち、いわゆる「絵入源氏物語」の附録の版本および「統群書類從」所収本と、それらの書写本を中心とする一類本、それに対し後半部に大きな異同を持つ写本群である二類本、という二系統に大別されたのである。以後もこの分類は踏襲され、現在のところ版本およびその書写本以外に次の諸伝本が知られている<sup>3)</sup>。

(一類本)

宮内庁書陵部蔵本(乙本)・天理図書館蔵本

(二類本)

前田家尊経閣文庫蔵本・東海大学桃園文庫蔵九条種通筆本

祐徳稻荷神社中川文庫蔵本・故本位田重美氏蔵本(甲・乙)  
京都大学附属図書館蔵平松家本・宮内庁書陵部蔵本(甲本)  
島原図書館松平文庫蔵本

ところが、これら二系統の成立については様々に論じられてきたものの、いまだ決着がつかないのが現状である。このため、今後とも諸本の発掘につとめ、詳細な比較検討を行うことが求められているといえるだろう。

稿者は右の問題意識のもと、先に二類本諸本を比較し、諸伝本の相対的位置について検討を行った<sup>4)</sup>。その際に従来の研究では取り入れられなかった一伝本として、新たに管見に入った筑波大学附属図書館蔵本(以下、筑波本と略す)を検討対象に加えたのであるが、筑波本の書誌等には触れえなかった。また、筑波本は、二類本の中でも特異な補入が一部になされた伝本群の一つであることを述べたのであるが、その性格についてはいまだ検討の余地があると考える。このため、本稿ではまず筑波本を改めて紹介し二類本に属する写本であることを確認した上で、筑波本を含む一部の特異な伝本群についてその性格を明らかにしていきたい。

### 一 書誌および分類

筑波大学附属図書館蔵本(ル二二〇―四四準)は、『補訂版 国書総目録』において「山路の露」の伝本として「教大(享保二二写)」と載せられている。しかし、見返しが剥がれた部分に本文とは別筆

で書き入れのある他は、識語等も見当たらない。一方、『筑波大学和漢貴重圖書目録』(平8)においては「江戸時代中期」写」とあるのみで、おそらくこれは共に収められている『源氏物語』本文の書写年代を推定したものとされる。このため、なぜ享保十二年写と認定されているのかは不明である。

次に当該本の書誌を挙げる。

綴葉装。表紙は本文共紙、金泥草木絵。見返し本文共紙で、本文は厚様。外題・内題ともになし。縦二・三・九cm×横一七・六cm。一面九行。全四十七丁。蔵書印なし。奥書・識語等なし。書き入れ「武蔵のゝ原に／かばねを／すつる共／〇〇國の君か為」(前見返し剥落部分)。「源氏物語」五十二帖(胡蝶・宿木巻欠)と共に全黒漆塗抽出木箱(三棚×二列、計六棚)に収納。ただし、『源氏』とは装丁が異なり、本文も別筆であるため、当該本は伝来の過程で別経路から手に入れ、共に収められたものと思われる。

ではここで、前稿でも述べた通り、当該本が二類本に属する一伝本であることを確認しておきたい。伝本二系統分類の際に最も重要な指標となる物語後半の約一丁分の異同部分について、両系統の本文を掲げた後、当該本の本文を提示する。両系統の本文の引用は、山内洋一郎氏が二系統を対校の形で示された『外編源氏物語山路の露山内洋一郎』に拠る。

〈両系統共通部分〉二類本が主行、一類本を対校

いゝまぎらはして打そむきたまへるかたはらめ、あひ行づき、いひ知ずをかしげなるを、いとゞしかなしとおもへり。

〈二類本独自本文〉

「都にもたれかはしりきこえん」などいひて、尼君のかたへ「つぎせぬことどもを返くうれしくも有がたくもさまぐ思ひみだれ侍、いかさまにもかさねてやま路わけ侍らむおりぞ、心しづかに」などいひ入たる。(中略)姫ぎみは、なごりもこひしく打ながめて、さまぐ成ける身のありさま、おほしつゞけて、なをさめやらぬ夢のこゝちし給にも、よろづをそぎすてゝ、おこなひをこゝろに入給て、いとゞし給。

〈一類本独自本文〉

「みやことでもなにかさのみ人めしげう侍らん。ことさら山里びてつくらせ侍べき」など、御心につくさまにきこえなすも哀なり。(中略)道すがらみるそのあたりの山さへかすかにとをうなるまゝにいとゞ心ほそくて、かしこには又なごりかなしくて、ながめ給ふまぎらはしに、君は例のごやのをこなひに心入給へし。

〈両系統共通部分〉

うこんは其くれほどに殿へまゐりたればれひよりも人ぞくなに、しめやかにて、はしつかたにみすまきあげて、笛吹きすさびて、をはしますほどなりけり。(四六頁七行〜四九頁三行)

両系統に異同があるのは、浮舟母と右近が小野を訪れた場面である。

そして筑波本で当該箇所を見ると、以下のようになっている。

〈両系統共通部分〉

いひまきはしてうちそむき給へるかたはらあひきやういひし  
らすおかしけなるをいとゝかなしう思へり

〈両系統相違部分〉

みやこにもたれかはきくらんなといひてあま君のかたにつきせ  
ぬ事ともを返くうれしくありかたくもさまくおもひみたれ  
侍るいかさまにもかさねて山路分侍らんおりそ心しつかになと  
いひ入たる（中略）姫君は名残もこひしううちなかめてさま  
くなりける身の有さまおほしつゝけてなをさめやらぬ夢の心  
ちそし給ふにもよろづをそきすてゝおこなひを心に入給ひてい  
とゝし給ふへし

〈両系統共通部分〉

右近はその暮ほとにまいりたれはれいよりも人すくなにしめや  
かにてはしつかたにみすあけて笛ふきすさひ給ふておはします  
ほとなり

多少の異同はあるものの、二類本独自本文とほぼ同じであることが  
わかる。さらに、両系統の大きな異同として指摘されているもう一  
箇所についても確認しておきたい。これは先ほどの例がそれぞれに  
異なる本文を有していたのとは異なり、二類本のみがある一文を有  
するといふものである。以下、その箇所を引用する。

〈両系統共通部分〉

ましてはかなきしも人<sup>トバ</sup>などは、この御方の<sup>御</sup>ことといひ<sup>思</sup>ば、  
まめやかに出入りなむをやくとしけり。

〈二類本独自本文〉

あまぎみも明くれみたてまつりあつかふをこそ、此世のなぐさ  
み、山ざとのひかりとおぼしつるを、いみじき御とぶらひども  
に、御くにのやまにあまるばかりなるに、こちたきまでほとけ  
はかの世このよたすけたまふとも思ひしる。

〈両系統共通部分〉

のどやかなるゆふつかた、大将の君・兵部卿のみやへまいりた  
まゑるに、「宮はたゞ今なん六条院にわたりたまへる」ときこゆ  
れば、たいの御かたへまいりたまへり。

（五四頁四行〜十二行）

次に筑波本の当該箇所を挙げる。

〈両系統共通部分〉

ましてはかなき下人などは此御すかたの事といへはまめやかに  
出入なんをやくとしけり

〈二類本独自本文〉

あま君もあけくれ見奉りあつかふをこそ此世のなくさみ山ざと  
のひかりとおぼしつるをいみじき御とぶらひどもに御くにの山  
にあまるはかりなるにこちたきまでほとけはかの世このよたす  
け給ふともおもひしる

〈両系統共通部分〉 抹消線は見せ消し部分

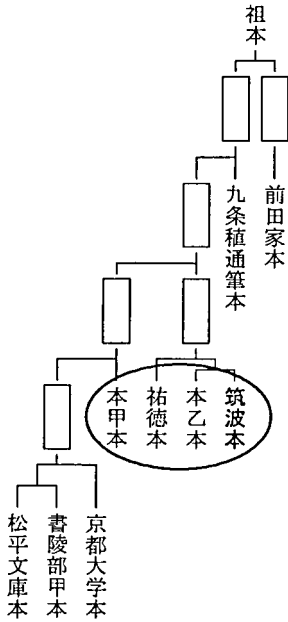
のとやかなるゆふつかた大将の君ひやうふきやうの宮へまいる給へるにみやはたゞいま六条の院にわたり給へる<sup>とせき</sup>れい<sup>の</sup>心<sup>に</sup>止<sup>め</sup>られたいの御かたへまいる給へる

先に確認した大きな異同と同様、やはりこの個所も二類本に特徴的な独自本文を持つてることがわかる。

以上のように筑波本は、伝本二系統を識別する大きな指標となる個所がいくつもある、これまでに二類本とされてきた伝本群とほぼ同じであることから、二類本に属する写本であると認定できるのである。

## 二 二類本における特異伝本群について

以上の結果、現在確認できる二類本は全九本ということになる。これら九本の相互関係、筑波本の相対的な位置は前稿で述べた通りで、次のような伝本系統を想定するものである。



\*  部分に当たる伝本は一本であるとは限らない。

当該本は故本位田重美氏蔵甲・乙本（以下、本甲本・本乙本と略す）および祐徳稻荷神社中川文庫蔵本（以下、祐徳本と略す）と近接した位置にあると考えられるのであるが、ここで問題となるのが、筑波本を含むこれら近接した四伝本が、他の諸伝本にはない語句を以下のように複数の箇所において有するという点である。

(1) 心さまなども（二七ウ・9<sup>6</sup>）

右近は心さまなども（筑波本・本乙本）

右近心さまなども（祐徳本・本甲本）

(2) おほつかならぬほとに（五〇オ・1）

いかにとおほしやりおほつかならぬほとに

（筑波本・祐徳本・本乙本）

いかにとおほしやりておほろけなからぬほとに（本甲本）

(3) 物ともさまく（五〇オ・2）

物ともみつからの御れうきぬわたなどやうのものさまく

（筑波本・祐徳本）

物ともみつからの御れうきぬわたなどやうの物さまく

（本甲本・本乙本）

\* (4) いみしう（二八オ・2）

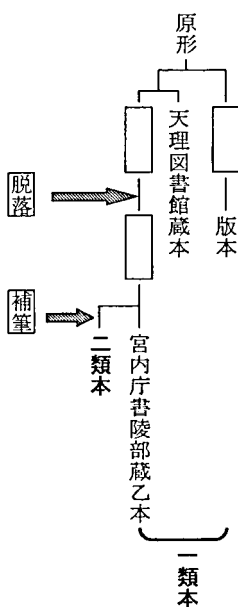
いみしうかたしけなしとてまいりぬ（筑波本・本乙本）

いみしうかたしけなしとて参ぬ（祐徳本）

(4) は本甲本のみ異なるものであるが、いずれの例も他本より多くの語を費やして語っており、前稿ではこれをこの一群の補入であると

結論づけた。その点についてまず補足をしておきたい。

本稿はじめに述べたように、『山路の露』の伝本は大きく二系統に分かれるのであるが、その成立についてはまだ議論が分かれている。しかし、稿者は諸伝本を参照した結果、本位田氏が宮内庁書陵部所蔵乙本の形態に着目され一類本を原形と論じられたのを支持する。すなわち、書陵部乙本のような脱落の生じた伝本に補筆したのが二類本であり、一類本がより原形に近いと考えるのである。



これに基づき、先の(1)～(4)について一類本諸本をながめてみると、次のようになる。

- (1) 心さまなども (慶安版本)
- こころさまなども (書陵部乙本)・心さまなども (天理本)
- (2) おほつかなからぬほどに (慶安版本)
- おほつかなからぬほどに (書陵部乙本・天理本)
- (3) 物どもさままゝこちたくて (慶安版本)
- 物どもさままゝこちたくて (書陵部乙本)

物どもさままゝこちたくて (天理本)

(4) いみじう (慶安版本)・いみじう (書陵部乙本・天理本)

いずれも問題となる四伝本以外の二類本とほぼ同じ表現であることから、これらの箇所は、『山路の露』の原形においては存しなかったこと、すなわち筑波本以下四伝本の独自補入であることが確認できるのである。

では、なぜ四伝本は独自に言葉を補っていったのだろうか。当該箇所の前後をも考慮し、考えてみたい。筑波本その他四伝本の補入箇所は(一)内に補って提示する。

(1) かの君うごといひしし、ししうななとも、ほとなく后宮にまいりてさふらひけれと、なをなけきほれつ、あやしきにうつろひゐたりしに、ききいてたまひて、あはれとおほして、(右近は)心さまなどもよかりしものとみをき給ひたれば、しのひてまいるへくのたまひ、てなとつかはしければ、(二七ウ・五)

浮舟の侍女である右近を薫が呼び寄せる場面である。ここで当該本群は「右近(は)」という主語を補うのであるが、物語の流れからみると、以下の場面において呼び寄せられた右近は薫から浮舟母のもとへ使者として遣わされ、かつ小野の浮舟のもとへと訪れるという役割を果たす。ここは明らかに右近でなければならぬのであり、またそれは容易に読みとれる。しかし一つ気にかかると、二重傍線部において右近と侍従とが並列で示されている点である。これにより、確かに当該伝本群以外の二類本の場合、以下の物語を読めば

右近が呼び寄せられたことは明らかであるが、この箇所のみでは右近と侍従いずれが薫と呼ばれたものか判断しがたいのである。版本においては、

かの右近といひしはじごうなど程なくきさいの宮に参りてければ(以下略) (慶安版本 二〇ウ・3)

とあり、薫が想起した相手が右近であることは明白である。当該伝本群は、二類本の曖昧な表現をより確かなものとするために、主語を補ったといえるであろう。

(2)(3)山さと人(いかにとおほしやり)おほつかなからぬほどに音つれたまひつゝ、春をむかふへき心まうけの物とも(みつからの御れうきぬわたなどやうのもの)さまくこちたうて、うこん心しらのしたてまめやかにこまくおほしやりたれば、

(四九ウ・9)

(2)と(3)は同じ場面に属するため、まとめて考えてみると、ここは物語終盤、薫の正妻である女二の宮の懐妊とそれに伴う周囲の慌ただしさを描いた後、薫が小野の浮舟のもとへ手紙を送り、またさまざま贈り物をする様子が描かれる場面である。(1)とは異なり他の二類本の表現でも全く問題はない箇所であるため本文読解を目的とした補入ではなく、物語世界に飽きたらず手を加えたものと考えられよう。そこで補入の内容に目を向けると、二つはいずれも薫から浮舟への配慮を増幅したものと読みとれる。そしてこういった薫から他者への気配りというのは、『源氏』本篇においてすでに数多く描かれたも

のであることが想起されるのである。

○『源氏物語』橋姫(⑤一五二)<sup>7)</sup>

またの日、かの御寺にも奉りたまふ。山籠りの僧ども、このごろの嵐にはいと心細く苦しからんを、さておはしますほどの布施賜ふべからむと思しやりて、絹、綿など多かりけり。御行ひはてて出でたまふ朝なりければ、行ひ人どもに、絹、綿、袷袢、衣など、すべて一領のほどづつ、あるかぎりの大徳たちに賜ふ。

○『源氏物語』宿木(⑤四六二)

明けぬれば帰りたまはんとて、昨夜後れて持てまゐれる絹、綿などやうのもの、阿闍梨に贈らせたまふ。尼君にも賜ふ。法師ばら、尼君の下衆どもの料にとて、布などいふ物をさへ召して賜ふ。

当該箇所の贈り物の内容である絹・綿に限ってみても、右のように二箇所を見出せる。この他にも、特に宇治十帖前半の巻々において薫は宇治の姫君およびその周囲に向けてさまざま物を贈るのである。それを考え合わせると、当該場面の「物どもさまざま」という概括した贈り物描写に不満をおぼえた後人が、『源氏』本篇にならいこの記事を増幅したと考えるのが妥当ではないだろうか。特にここで贈られる相手は尼姿の浮舟であり、宇治十帖において阿闍梨や法師、尼君に薫から届けられた絹・綿があらためて選び取られたものうなづけよう。

なお、これと類似した表現が、両系統の大きな本文異同部分における一類本にはすでに用いられている。

さまぐなるきぬあやなどもたせたりける、とりいで、姫君の御れうはさらにもいはず、尼君にも所せきまで奉りたれば、又なき身によろこびさはきて、物さびしき尼君どもなど、めさめたる心ちなんしける (慶安版本 二二三オ・六)

浮舟母から浮舟および尼君への贈り物であり、主体は異なるが、「きぬ」「御れう」とその中身に共通点が見受けられる。しかし、もしも当該伝本群がこのような表現を持つ一類本と交渉を持ったのであれば、この(3)だけでなく、もっと多くの箇所、特に両系統の大きな本文異同部分において一類本の形跡をとどめてよいはずで、なぜここに限って細かな補入を施したのかという疑問が残る。このため、これを両系統の交渉の痕跡とはせず、『源氏』本篇を念頭に置いたことによる偶然の一致と見ておきたい。

(4)てなとつかはしければ、いみしうへかたしけなしとてまいりぬ。よろこひ、さふらひなれたる人々にもことなからねは、きみもめやすしとおほしけり。(二二八オ・二)

(4)は先の(1)直後に続く部分である。薫に呼び寄せられた右近が喜んでこと、さらに参上した後はもとから薫の元にはた女房たちに特に見劣りすることがなかったことが記される。ここは他の二類本の表現では、右近が薫の誘いを知ったところから実際に赴くところまでが同時に記され、いつの間にか右近は薫邸の一員となっており、わかりづらい一文となっている。版本においては、

きぬなどつかはしたれば、いみじうよろこびてまいりけるを、も

てなしありさま、もとよりまじらひなれたる人々にもことなからねば、君もめやすしとおほしけり (慶安版本 二〇ウ・七)

とあり、この間の経緯が非常にわかりやすい。二類本は『山路の露』本来のこういった表現から誤脱を起こした結果、文意がとりづらくなつたものと推測される。そして、それを前後の文脈から読み解き、よりわかりやすくするために言葉を補ったのが当該伝本群であると考えられるのである。なお、「かたじけなし」は『源氏』本篇においては匂宮へ向けられることが非常に多いのであるが、『山路の露』では「此との(薫)と(常陸介一家ニ対スル)御かへりみのよろつにかたしけなく」(三二オ・四)、「薫ガ」うごんなどまてたづねがすまへ総ふもたゝその(浮舟ノ)御ゆかりとおほしためるこそかたしけなくみたまつり侍れ」(四一ウ・五)のように、浮舟母およびその周辺から薫へ向けられる語となる。特に二例目では右近が小野を訪れた際に浮舟に対し、薫のもとへ自分が伺候した経緯を語る中でその待遇を「かたじけなし」と述べており、当該伝本群の補入はこれを参照したものと見てよいのではないだろうか。

以上のように個々を検討すると、二類本が派生本文系統であるために問題が起こった箇所に対し、文意をわかりやすくするために言葉を補う場合(1)、(4)と、物語世界に飽き足りず表現を付加する場合(2)、(3)とがあることがわかる。しかしいずれにせよ(3)では『源氏』を、(4)では『山路の露』の後半部分を、それぞれ参照しており、単なる思いつきではない、考慮された補入といえよう。

おわりに

以上、筑波大学付属図書館蔵本についてその位置づけの確認と、周辺伝本群の特色の検討を行った。物語本文のできるだけ原形に近づこうとする本文研究の目で見れば、筑波本の資するところは少ないといわざるをえない。しかし、『源氏』五十四帖と共に収められるという伝流の形態、そして後人が手を加えるという本文の状態は『山路の露』がいに享受され今日まで伝わってきたかという様相を知る上で非常に興味深い。『山路の露』享受史を考えるにあたっては欠かせない一伝本であると位置付けたい。

〔注〕

- (1) 池田亀鑑氏「古本山路の露」(日本古典全書『源氏物語』七(昭30 朝日新聞社)所収)
- (2) 本位田重美氏『源氏物語 山路の露』(昭45 笠間書院)
- (3) 注(2) 掲出書、および山岸徳平・今井源衛氏『山路の露・雲隠六帖』(昭45 新典社)による。
- (4) 拙稿『山路の露』伝本研究——二類本九本の位置付けについて——(『国文学研究』第一七五号 平14・9)
- (5) 山内洋一郎氏『源氏物語 山路の露 本文と総索引』(笠間書院叢刊)113(笠間書院 平8)

(6) 二類本の引用は前田家尊経閣文庫蔵本による。同本を底本として用いるのは注(4) 拙稿における検討に基づく。

(7) 『源氏物語』の引用は「新編日本古典文学全集」による。

(8) 『やがて、さしめさむ日を、かねては散るまじきさまにたばからせたまへ。かくかたじけなきことどもを見たてまつりはべれば、身を棄ても思うたまへたばかりはべらむ』と聞こゆ。』(浮舟⑥一九一)など、匂宮から浮舟への思いと行動に対し「かたじけなし」と評されることが多い。

〔付記〕貴重なお蔵書の閲覧を許可して下さった筑波大学附属図書館およびその関係者の方々に、記して厚く御礼申し上げます。

——おか・ようこ、広島大学大学院博士課程後期在学——